

〔 編 集 後 記 〕

昨年の夏に編集委員長の野田教授から編集委員に推薦されたご連絡をいただき、たいへん光栄な事ですので喜んでお引き受け致しますと返事をしてからほぼ1年が立ちました。今回、初めて編集後記を担当することとなりました。今後ともよろしくお願い致します。

本号は原著論文が1編、話題が1編、海外便り1編、学会記録3編、雑報1編、open access paperの症例報告が1編と盛りだくさんの内容となっています。杉本先生の原著は社会性の極めて高いDVに関する論文です。e-ラーニング・コンテンツの利用によるデートDV防止教育の可能性に言及したもので、非常に興味深く、社会的にその有用性が期待されるものです。e-ラーニング・コンテンツは論文中に記載のあるサイトから誰でも自由に閲覧することができます。この論文がきっかけとなり是非ともDVが少しでも減るよう本誌が役にたてばと心から願います。

金子敏郎名誉教授による話題は特定機能病院として提供すべき「良質の医療」について、ご自身の治療体験をもとに言及されています。全くの偶然ですが当科での治療に関連しています。当科に対するお褒めの言葉にたいへん恐縮し、面映ゆい気がしておりますが、このような光栄な評価に恥じぬ様、今後もお一層努力せねばならぬ事を改めて実感致しました。

臓器制御外科の細川先生による留学記は、肝移植で非常に有名なパリのポール・ブルッス病院に関して報告です。外科医としてはヨーロッパでのトップレベルの移植病院の様子が良く判り非常に興味深いものでした。また、パリの香りが感じられ、久しぶりに秋のパリを訪れてみたくなりました。学会記録は整形外科学、救急集中治療医学、精神科学の例会でありいずれも学内、関連施設から様々な報告が行われており、まさに千葉医学の

拡がりを実感させられるものであります。筑波大学の教授に就任された関根先生はこのところ多くの内容を本誌へ投稿されており、今回はがん臨床でのインフォームド・コンセントに関し、法的側面から述べています。多くの論文を参照しており、その内容は折しもこの10月から医療法の改正により実施される『医療に関して起こった予期しない死亡例』を第三者機関に届けることが義務づけられたこの時期に非常に有用なまとめになっています。全くの私事となってしまいますが、千葉大学医学部水泳部の仲間として、関根先生の活躍は非常にうれしく思っております。

症例報告は環境生命医学、整形外科学の鈴木先生による滑膜炎、座瘡、膿疱症、骨化症、骨炎を呈するSAPHO症候群という外科医の私にとっては全く馴染みの無い症候群に関する治療奏効例の報告です。このように自分の専門と関係のない症例、研究などに触れられ、勉強になるのが千葉医学雑誌の非常に素晴らしい点であると再確認されます。鈴木先生は本学でのご遺体を用いた外科手技の取得などのためのクリニカルアナトミーラボ(CAL)を熱心に推進されており、千葉大学はすでに日本でのCALのメッカの1つになっています。日本外科学会の委員会へ報告する義務があり、その中で千葉大学医学部の報告例は日本の中でトップクラスとなっています。その多忙な業務の中でこのような貴重な症例を論文として発表されるその熱意と努力に心から敬意を払わずにはられません。

今回、編集後記を担当し改めて千葉医学雑誌の内容を俯瞰するとそのすばらしさを再発見しました。今後も千葉医学の発展のため尽力していきたいと考えています。皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(編集委員 松原久裕)